

Title	発展拠点としてのイベリア経済の特質：国際経済発展史と類似性仮説
Sub Title	The characteristics of the Iberian economy and its pioneering role in the history of international economic development
Author	白石, 孝
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1978
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.71, No.2 (1978. 4) ,p.106(16)- 117(27)
JaLC DOI	10.14991/001.19780401-0016
Abstract	
Notes	山本登教授退任記念特集号 論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19780401-0016

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

発展拠点としてのイベリア経済の特質

—国際経済発展史と類似性仮説—

白石 孝

序

国際経済発展史の一断面として、欧州と新大陸の経済発展の連関メカニズムを史的に画こうと試み、その素描というべきものは、すでに『三田商学研究』19巻2号に記したが、更に、その後、イベリア半島の様々な特性を検討するにつれ、それがラテン・アメリカへの植民と発展のパターンを基本的に左右するものであったこと、そこにいくつかの新しい研究への緒口があるかの如く思え、これに関する草稿をしたためてきた。本論文は、この要旨をまとめあげたものである。

まず、イベリア半島の地理的な特性は、欧州的ではないばかりかラテン・アメリカのそれに酷似していること、またスペインとポルトガルの地理的相違がそれぞれのラテン・アメリカへの対外行動様式を異ならしめるものであったことを強調する。一方、周知のようなイベリア半島の民族史やその中でみられたキリスト教徒対回教徒の抗争の過程は、この独特のカルチャーを形成させただけでなく、その歴史的経験と地域的な差異がそのまま新大陸小征服や初期植民者の行動に反映し、植民地社会の構成を特異ならしめたものと言い得よう。本論文の第一節は、主としてこの二つの点を明示しようとしたものである。これは筆者の提示する「類似性仮説」の一部をなすものである。

第二節では、スペインの産業の背景について、ムーア人の追放の経済的意義を技術・労働人口の点から指摘するとともに、産業・貿易の地理的考察、なかでも穀物・小麦不足と地方的過不足調整の困難さからするボトルネックをあげ、他方、当時の欧州における人口の増加→需要拡大がスペインの産業繁栄のバック・グラウンドをなしていたことを述べる。

第三節は、まずポルトガルに焦点をおいて、スペインとの対照を考慮しながら、その特徴を画く。地理的に、また産業の上でもかなりスペインに比して単調で、回教徒の影響もスペインほど強くないが、北部と南部の構造的相違がここでは最も注目すべき特徴となる。そして、探索→移民→栽培→輸出というパターンの背景にふれ、これがブラジル植民地の産業社会的原型をなすとともに、マディル島からの東アフリカ沿岸航路発見のプロセスを、探索→奴隷輸入→栽培→輸出⇒探索→……

発展拠点としてのイベリア経済の特質

の動態的フォームで示そうとするものである。

この論文はまだ歴史の専門的検証を得るまでにいたらないとはいえ、国際経済発展史の意図した分析の流れが少しずつ明瞭になってきた研究の一里塚になると考えている。前出論文の素描から更にこの覚書へと発展したことについて、大方の御教示を得られるならば幸せである。

第16世紀から第17世紀にかけて、イベリア半島の二国、スペインとポルトガルは、新世界と旧世界とを結ぶ動的な中心地として、まさに国際経済の重要な発展拠点をなすものであった。⁽¹⁾

もちろん、これまでも、この両国の新大陸の発見と喜望峯迂回の東印度貿易航路の発見、これによる植民地貿易の世界史的意義は様々な角度から画かれてきた。ただどちらかという、そのような歴史的考察は、アラビア人やイタリア人の手に握られていた東方貿易の利を求めようとした欧州諸国の新航路開拓というところにアクセントが置かれ、イベリア半島の二国はそのパイオニアとして位置づけられており、二つの新しい世界が開かれることによる意義に関しては、これが欧州経済の発展にどのような歴史的変革を与えたかが中心であったといえるであろう。⁽²⁾ それだけに、イベリア半島のもつ歴史的諸特性やラテン・アメリカの発展史は、この歴史的流れからすればマイナー・タームである。しかし、今、筆者が画こうとしているイベリア半島、ラテン・アメリカ、北米、欧州の多角的な経済発展史の相互関係からすれば、むしろこの二つの直接のかかわりあいこそ重要な分析のプロローグをなすものである。そして、これにより、なんらかの新たな仮設が示され得るように思われる。

まずここでイベリア半島それ自体の歴史的・風土的・文化的性格について考えてみたい。実はこれこそが国際経済発展史を大きく左右するものであったからである。

第一に、イベリア半島の地理的環境そのものは、欧州の中でもかなり特異な姿をもっていたと言えよう。端的に言えば、欧州にあって欧州的ではないということになるろうか。それは海拔五百メートル以上の山地が五分の三を占め、平均高度はスイスに次ぎ、まさに山国である。フランス国境のピレネス山脈により丁度くびれたような地形に突出し、このピレネスにつづいて、北方アッソリア及びガリシア北方に連るカンタブリア山脈が、ビスケー湾の南からフィニステル岬にわたり、中央部にはグェダラマ山脈がソリア地方から西に走ってポルトガルのロカ岬に達し、またオレタム山脈、南部のモレーナ山脈やシェラ・ネバダ山脈がこれと同じように東西に走っている。そして、このシェラ・ネバダ山脈はジブラルタル海峡をわたってアフリカのアトラス山脈に連なっており、全

注(1) 拙稿「国際経済発展史の一断面—欧州と新大陸の経済発展メカニズム試論—」三田商学研究19巻2号。

(2) 典型的なものはいまでもなく大塚久雄「近代欧州経済史序説」。

体として、この半島は地中海と大西洋に面しつつ、多くの山脈によりこの間が幾重にもさえぎられていることを知っていかなければならない。これは南北にわたる文化の交流を制約し、地方的よどみを生むゆえんをなすだけでなく、半島の産業活動にも多くの特色をもたらすものであった。

河川はアラゴンの山地をぬって地中海に流れ入るエプロ河を除き、そのほとんどが大西洋に流れ込んでいる。しかも、タホ河、ドエロ河は半島の西方、ポルトガル河岸に開いている。アダルキヴィル河が豊かなアンダルシア平原を潤していることは事実だが、総じてスペイン国内の河川は水量が少なく水運の便に乏しい。これは前述の山脈とともに、スペインの一つの経済的問題として交通のボトルネックをもたらすことになったところである。

気候は地方により著しく異なっている。北部及び中央高原地帯は冬寒く、海岸への斜面地帯は温暖ではあるが、東部及び南部海岸地帯は夏が非常に暑い。夏期は北部地方を除き乾燥し、南部・中央部の炎熱は一層はげしく、東部ではしばしば早ばつに悩まされるのが常である。この意味では、この半島の経済生活はかなりきびしく、その地方差による環境要因の作用を無視できぬものになっていると言えよう。

こうして、イベリア半島の地理的環境はかなりの特性をもっているし、前述の如く、欧州的でないと言えるけれども、同時に、これをみると多くの点でラテン・アメリカのそれに似かよっていることに気がつくまいか。殊にスペインについては、まさにラテン・アメリカ的である。高山・寒冷な台地、亜熱帯の低地、多湿地帯と乾燥地帯など、およそラテン・アメリカにみる風土であろう。多分、中南米を発見し、そこに移住した人々にとって、この地が母国と類似していると思わしめるとしても当然であつたらう。ハイチがスペインに似ているが故に、エスピノールと命名されたのもそうだったし、メキシコに上陸し白亜の家屋をみてニュー・スペインとよぶに至った史実もこれを物語るとはいえ、多くの小征服者達の行動をみても、この地理的類似性があるところをこ理解できるところと言ひ得る。事実、ラテン・アメリカの歴史家達は、この初期の発展史を特徴づけて「スペイン本国の海外県⁽³⁾」という。これこそ、スペインの植民地形成が他の欧州諸国のそれ、殊に北米と本質的に異なるゆえんをもたらすものであったと言っても過言ではあるまい。

また、この地理的環境は後述するよりに、スペインとポルトガルの経済的差異をもたらしただけでなく、両国のラテン・アメリカへの対外的行動様式を大きく左右したのもであつたらう。この半島は大西洋と地中海に突出し、欧州・地中海沿岸・アフリカ西海岸・新大陸への多面にわたる貿易を可能にした地形をもつが故に、沿岸地帯の漁業、海運の発展を早くからもたらした点では、この両国は一致した条件にあるとしても、そのもつ意味なり経済的比重、歴史的條件では異なっていたといふべきであつた。第一に、地中海に面し南国的風土をもち、すでにイタリア諸都市の商人

注(3) A. Curtisswilgus & Raul d'Ea, Latin American History, 1963, p. 19.

(4) M・ピコーン＝サラス「イスパノ・アメリカ文化史」村江四郎訳, p. 53.

発展拠点としてのイベリア経済の特質

・漁夫・船乗りなどの活動下に繁栄し、最もアラビア人回教文化の影響を受けていたスペインの沿岸経済と、直接大西洋に面し新大陸発見前は欧州大陸の最南端に位して、三方をスペインに囲まれ、ただ灰色の果しない海を相手としてきたポルトガルの沿岸経済とは自らその質を異にしていたということである。第二に、その国土において、政治的に経済的にスペインはその中心は沿岸よりも高原台地にあったというべく、これに対して、ポルトガルではその中心は沿岸都市にあり、内陸部の生活圏そのものが大西洋に結びつけられていたといえるのであった。これを今、端的な言い方で対比するならば、スペインは高原台地型でありポルトガルは沿岸型であった。これもまたラテン・アメリカにおける両国の植民地形成の特徴的相違をもたらすものであったと言い得る。

ここで、更にわれわれはその民族史にも眼をむける必要がある。というのも、そこにもイベリア半島の重要な特質があったからである。

歴史的に必ずしも明確ではないが、半島の民族はアフリカ北岸から紀元前三千年頃に来往したイベロ族に始まるといふ。これは後にこの半島を支配した回教徒達が「かつての故郷の一つ」として領有する有力な根拠としたものであった。⁽⁵⁾ 次いで紀元前6世紀頃に、北欧から大西洋岸にケルト族が来住し、中央部でこの両民族が混血し、ケルティベリア族を作ったが、その後、フェニキア人、カルタゴ人が地中海沿岸に来て、それをローマ人が征服し、第5世紀まで約600年間にわたる支配を続けた。それにより都市がつくられ、ローマ法、ローマの風習がうちたてられると共にキリスト教が伝来した。しかし、ローマ帝国の衰微にともないアリアン系のヴィンゴード族が支配者となり、前記のケルティベリア族を圧迫した。それによりローマ的社会や制度は著しい変革を受けるに至ったのである。そこに新しい侵入者をむかえる。これが回教徒アラビア人である。

彼等は711年にイベリア半島に侵入して来たが、7年後にはアストリアを除く全土を支配し、オマイア王朝が樹立されたが、これは第10世紀には完全にその文化をこの地に定着させていた。と同時に、この民族史はその多彩な民族の構成から割拠性をもたらし、キリスト教徒対回教徒との闘争、これを通してのキリスト教王国の成立、その統合と拡大の歴史をつくり出すのであった。イベリア半島にみるこの地方割拠性は、もちろん前述の地理的環境にもよるが、来往したアラビア人自体ですらも、オマイア王朝にみる如く、本来、割拠性が強いという特色をもっていたことにも遠因する。⁽⁶⁾ この回教徒に対するキリスト教徒の抗争は、すでに910年にレオン、ナヴィラ、バルセロナ諸王国を生み、更にその後、スペインの中心をなすに至るカスティア王国がつくられ、ポルトガルがその地を次第にこの半島の一隅に割することによって、キリスト教諸王国をこの半島の中に割拠せしめる結果となった。第12世紀にはレオンとカスティア王国が統合し、アラゴン王国がその周辺を併合

注(5) アミール・アリ「回教史」塚本五郎・武井武夫訳、p. 418.

(6) この歴史的特色は、かなり重要な遺産となるし、ラテン・アメリカでの行動様式をみる場合でも考慮するべきであろう。「アラビア人貴族は独裁政治を憎んだ。これが準寡頭政治小国家の連邦にして、互いに戦いたい時に戦い、北方キリスト教侵略者の危険が大きくなるという場合には団結するよう望んだ」アミール・アリ前掲書 p. 419.

し、半島の約半分はキリスト教王国となった。第15世紀後半、このキリスト教二大王国、カスティアとアラゴンが併合し、回教徒はグラナダに圧縮され、遂にイベリア半島から放逐されることになる。ここに歴史的抗争は終了するに至るが、その過程は欧州の中にあってもイベリア半島の二国が異なった歴史をもつことによる様々な特性を加える背景をなすものになったのである。

かくしてスペイン人といってもまず多様である。皮膚が鶯色で眼の黒い中央部のカスティア人、金髪碧眼のケルト系の多い西北部のガルシア地方、他民族の支配を受けることのなかったバスク族の住むフランス国境、最もイベリア的といわれるアラゴン族や南仏的要素の強い地中海沿岸のカタラン人など、いわば千差万別であるが、この長い錯雑な民族史を通して抗争・支配・融合の結果、一応キリスト教王国として統一されてもなお、この割拠性からするそれぞれの地方の行動様式の相違はまぬかれ得なかったところと言えよう。同時にこの民族史は、この文化に幾層にも接ぎ木された独特のものを残した。実はラテン・アメリカのスペイン人の小征服者達や移民をみると、それが母国のこうした歴史的経験そのものをかなりよく投影していること、そこにも地理的環境とともに類似性を考えることができると言わなければならない。

事実、これらはラテン・アメリカの植民地時代の特徴を形成するものとして例証される。たとえば、植民地行政機構はその設置された自治体がカスティアの前例にならったものであったし、地域全体に普及したエンコミエンダ制は本国スペインの封建制度に由来する制度移殖にほかならなかったが、一層、右の民族史の投影と思われるのは、新大陸スペイン植民地が「アンダルシア的色彩が濃厚」であったといわれることである。⁽⁷⁾ 1492年から1592年までの植民数は、アンダルシアが1,915名、カスティア・レオンが1,797名で大半を占めているが、すでに民族史でわかるように、このアンダルシアは最もアラブ的影響を受け、長い混血の歴史を持っていただけに、その行動様式や社会的選好は、そのまま小征服者達の行為に反映したし、その後の植民地社会の構成を左右したものであったと言い得る。また、同じスペインの植民地でありながら、ラテン・アメリカでの地方的対立の存在そのものは、本国の割拠性の投影にほかならなかった。海岸の住民と高原台地と暑熱帯、寒冷地帯のそれとは互いに反目しあい、カスティア人、バスク人、アンダルシア人の対立もそのままこの地に持ちこまれたのであった。⁽⁸⁾

こうした特徴は、しばしば北米との植民の相違をもたらすものとして強調されてきたが、ここに述べた類似性の多くは、「スペイン人であったことが以後の歴史をアングロ・サクソンの北米のそれと異ならしめたものであった」⁽⁹⁾ とする以上に、国際経済発展史を大きく左右し、かつイベリア半

注(7) 田中耕太郎「ラテン・アメリカ史概説」上巻、pp. 158-159.

(8) これについては田中耕太郎前掲書190頁は「スペインが長年の間に地理的環境から養われた個人主義的精神は新大陸において一層誇張して発揮せられたのである」と説明する。しかし、そのカスティア人、バスク人、アンダルシア人の対立は、本稿のように更に歴史的な背景をもつものであり、今後より一層の検討を必要とするところである。

(9) 前掲「イスパノ・アメリカ文化史」はこの差異を強調するところに特徴がある。しかし、スペインの中世風の価値観

発展拠点としてのイベリア経済の特質

島をこの視点から史的に理解する重要な前提になると言い得るであろう。

二

イベリア半島のこれまで述べてきたような地理的環境や民族史は、その産業の発展や貿易を著しく特色のあるものにもしていたのである。

少なくとも第15・16世紀のイベリア半島の経済は、他の欧州諸国と比較して、かなり先進的であった。産出物の上でも多様であり、技術的にも進んでいたことは事実である。しかし、その多くは、長いアラビア人の支配のもとで、特に彼等の文化と技術に依存してきたものであった。このことは、スペイン経済の理解には欠くべからざるものと言えよう。実際、第15・16世紀に、回教徒の追放によってキリスト教王国が統一され今日のスペインやポルトガルが成立し、新大陸への遠心的拡大があった時代、イベリア半島が発展拠点としての経済力をもっていたというものの、次の世紀にはすでに衰退にむかってしまう歴史的結末には、この回教徒の追放それ自体の作用をみのがすことができないからである。⁽¹⁰⁾

イベリア半島では、アラビア人はあらゆる面で先進民族であった。土質に適する穀物の選択、それぞれにあう肥料や投肥方法の知識をもって、彼等は農業をたくみに開発したし、不毛な土地を沃野にする技術を伝えてきた。ヴァレンシア地方のエルチャルには大きな椰子林が作られたし、アラフエラ附近には多量の米作がおこなわれ、甘蔗と木綿はオリヴァとガンディアで、葡萄がヘラスとグラナダ、あるいはマラカで栽培されるといった多様な農業が彼等の手によって移植され、発展せしめられたのであった。毛織物についても、藍で黒く染める技術を発明し、瓦その他装飾・食器類の陶器製作においては、その技術は高度に優れたものであった。また皮の鞣、調整、染色、装飾加工に至っては著名であった。火薬・砂糖・紙・絹もスペインにもたらし、その産物に仕上げたのも彼等である。まさに、イベリア半島、殊にスペインの産業は、こうしたアラビア人の文化と技術の上に発達してきたと言ってさしつかえない。

このような民族的影響とともに、イベリア半島の産業・貿易を特色づけたものは、その地理的環境である。前述もしたような地形・気候から、産業のロケーションが大きく左右されている。まず注目されるのは山岳地帯の鉱産物である。対仏国境のピレーヌ山脈には、鉄・銀・銅が産出し、モ

の移植や殊に「さらに向うへ」(Plus Ultra)の精神構造を問題にする。こうしたラテン・アメリカと北米の歴史的対比は、いずれ国際経済発展史の新たな視点のもとで整理し直してみる要があろう。

注(10) Jaime Vices Vives, *The Decline of Spain in the Seventeenth Century, from the Economic Decline of Empires*, edited by Carlo M. Cipolla, 1970. pp. 133-135. ムーア人の追放がいかに農業技術を低下させ、人口の減少を通じて「スペインに取返し不能な損失を与えた」か、また地域的にはアラゴンがこのダメージを強うけた史実が指摘される。しかし、これが同時にスペインの産業技術、生産性への全般的影響を及ぼしたことは推測に難くない。

レーナ山脈やシェラ・ネバダ山脈にも同様の鉱産物がみられ、ビスケー湾の南に走るカンタブリア山脈東端にも鉄を産出する。そのため鉄産業はバルセロナやリポール、セヴラなどにも広がっているが、大西洋沿岸のオビエド・ビルバ附近は、特にこの産業が集中している地方としてすでに有名であった。これは当時の様々な器具や刀剣類、船骨・船具などの原料をまかない、かつスペインの貿易品として、その特産物の一つに教えられていた。同時に、こうした鉄や銀の鉱業が発達していたことは、スペインによるラテン・アメリカでの鉱業開発を可能にしたものであったと言い得る。これは自山鉱が少なくその技術を持ち得ず、産業的に沿岸型農漁業国のポルトガルと対照され、両国の対植民地行動様式の差異をも形づくる背景の一つとなったと言ってさしつかえないであろう。

この山岳にはさまれる中央台地には、羊牧が盛んであった。ピレネス山脈の南側、北部レオン附近はもちろんのこと、丁度、マドリッドを囲む中央部は羊牧地であったし、そここの高原台地に広範に営まれていた。羊毛は当時のスペインの特産物の一つであり、欧州でもイギリスと競争し得る地位にあったとみなされている。もっとも、これらの羊牧地はその地方により気候がかなり異なるため、夏・冬とそれぞれの季節に限定された羊牧がおこなわれていたこと、またいずれも山岳台地で、その主たる位置が中央部にあって、これを輸送する道路とその距離上の不利はいなみ得ぬところであった。⁽¹¹⁾毛織物は、従って羊牧地に近く中央部に集中していた。

地中海沿岸は、前述もしたように多彩な農漁業産地で、砂糖・オレンジ・オリーブを産出するが、その内陸部、殊にバルセロナ、ヴァレンシアの奥に広がる山岳側面の岩塩は、すでに欧州の生活必需品として、その重要な供給源となっていたのである。

さて、第13世紀から第15世紀にかけて、スペインの貿易路線は地中海貿易と大西洋貿易とに分けられるが、欧州との貿易からみれば、その路線は三つから成る。カスティア貿易、北方貿易、ハンザ同盟貿易であった。しかし、ここでもスペインの地理的特質から、それぞれの地域はこの貿易路線に各々特色をもっていたと言い得る。たとえば、東部アラゴン・南部のムルシア地方・南西部のアンダルシア地方は、地中海貿易を、そして北部のオールド・カスティア地方は、カンタブリア海を通して欧州北部との貿易をいとなみ、フランダースでハンザ同盟に結ばれていた。⁽¹²⁾スペイン貿易に関しては後に詳述するが、第16世紀の輸出入品をみると、前記のような産業の発達に照応して多様である。主たる輸出品は、羊毛・塩・オリーブ油・洋紅材料・鉄・動物皮革で、輸入品には毛織物・麻衣・雑貨・書籍・紙・小麦などであった。ただ、この輸入品にしても、決してスペインが欧州諸国に比べて劣っていたからではない。毛織物生産でもイタリアと充分競争し得たし、ポルトガルに輸出していたし、その染色技術の上では優れていたといわれる。また輸出品としても、この外

注(11) Jaime Vicens Vives, *The Economies of Catalonia and Castile, from Spain in the Fifteenth Century 1369-1516*, edited by Roger Highfield, 1972. p. 39.

(12) Jaime Vicens Vives, *An Economic History of Spain*, 1969. p. 222.

発展拠点としてのイベリア経済の特質

に、琥珀・アンチモニー・滑石・水晶・硫黄サフランや、アンダルシア海岸で採れる珊瑚、カタロニア海岸での真珠などがあつた。マラガ・グラナダ・ムルシア地方の絹は、国内市場の拡大に支えられて発展していたし、皮革製品は、すでに述べたような技術により良質で、南欧を通し順調に販売されていた。北部の鉄産業は、第16世紀には技術進歩によって殊に重要な輸出産業の一つになっていたのである。これに対して、当時のイギリスはまだハンザ同盟の商権下にあり、その奪還こそが大きな課題になっていたばかりか、産業の上でも、まだ農産物を中心とした後進国にすぎなかった。もちろん、以上のようなスペインの輸出入品をみると、かなり原料輸出、製品輸入の感がするし、それだけに、今日からすれば、その貿易・産業構造は、後進国型と思われるかも知れないが、当時の生産技術の上で、これだけの産物を輸出し得ること自体、かなり先進的優位性を示すものといわなければならないのである。

しかし、他方、当時のスペインにとって重要な問題は、穀物、特に小麦であつた。山岳地帯の多い同国は、それはアンダルシア地方とアラゴン地中海沿岸の平野を中心に、またその一部は中央部台地に産出してはいたが、気候上、しばしば不作にあい、その場合の供給不足は、輸入にあおがざるを得なかったのである。その上、地理的状況からしても、輸送上の困難から地方的な過不足を調整し難いことはいうまでもあるまい。そしてこの輸入は、ハンザ同盟やフランスによるものであつたが、なおこの場合、それらは主としてオランダやイギリスの船舶により転送されてくるのであつた。このことは、スペインの一つの大きな経済発展へのボトル・ネックといわなければならない。

産業の上で、穀物生産は、第15・16世紀の農業の重要な問題点であつた。当時の欧州全般もそうであつたが、その生産性は低く、たとえある地方の一部でこの改善をみたとしても、これは他に伝播することがなかつたし、他方、人口は黒死病による減退から回復し、更に増加の傾向をたどっていたから、食料は、相対的に供給不足をもたらしつつあつたと言つてさしつかえない。それだけに、スペインが欧州に依存しようとしても、こうした状況が内外共に生じていたことは、スペイン自体の食糧需給の輸入による調整を困難にし、この制約が様々な面にあらわれつつあつたことは事実である。そこでもし客観的に当時の状況から新大陸の発見と植民地に対する期待を考えるならば、その一つはこの新しい供給源にあつた筈と言えるかも知れない。しかし、後述するように、実際のラテン・アメリカへの植民地に対するスペインの行動様式は、この期待とは別の方向に進み、むしろ、その結果として、この制約を一層強めるものにほかならなかつた。これに対し、ポルトガルではすでに食糧問題を大西洋諸島の開発によって解決しつつあつたのである。

今、第16世紀の新大陸からの影響を受ける前の欧州を改めてみると、少なくともまず大きな歴史的経済基調の変化は、人口水準の回復と増加であつた。⁽¹³⁾ 1348～9年の黒死病以来、欧州の人口は一

注(13) 人口の変化の経済構造への影響については多くの研究がみられる。第15世紀の欧州経済と人口の変化に関しては、渡辺国広「戦後における社会経済史学の発達」社会経済史学、1954年、20巻。また Palph Davis, The Rise of the

時、三分の一に減少したが、1450年から1480年にかけて、この人口水準は大部分の国で回復をみせ、更に1460年から1620年の間には欧州人口全体で倍増をみるに至っている。これは前述の如く土地耕作問題=食糧問題を発生させたが、なかんずく都市に余剰生産物の供給を困難にしたことから、農村家内工業の発展をもたらしつつあった。一方、この需給逼迫から穀物価格の騰貴を生じ、土地所有者の所得を増加させ、これらの階層の所得上昇にともなう消費水準の向上から、奢侈品的農産物、たとえば果物・葡萄酒、また毛織物などの需要拡大をもたらして、これがまた土地の使用方法の高級化・多様化への生産シフトを誘い、更にその穀物の需給不均衡を招来するといった傾向を生じていたと言い得る。さきにかかげたスペインの産業が繁栄し得たのも、こうした欧州の全般の動向によるものであったろうが、しかし、イベリア半島自体の経済も、次第にこの動向と帰を一にするステップにふみ出しつつあったと言わなくてはならない。しかもそれは、スペインのもっている地理的環境や民族的特色より更に一層強められる必然性を含んでいたのであった。これこそ後に新大陸との関係を検討する場合、忘れてはならぬ重要な歴史的背景にはかならないのである。

三

これまで、イベリア半島の地理的環境や民族史の一端から、国際経済発展史を左右するに至った様々な背景を考えてきたが、そこでスペインとポルトガルの特徴的な相違にふれたものの、どちらかという、スペインに説明が偏したように思われる。それ故に、このプロローグで改めてポルトガルにスペインとの対照を考慮しつつ、その特徴的な諸点を述べておきたい。

まずこのイベリア半島西南端のポルトガルの地理的環境は、すでに述べたように、北部と東部・南部の三方をスペインに囲まれ、国土の東半山地はいずれもスペイン山地の延長であるという事実である。しかもスペインからみれば、河川がポルトガル領に下り、その西海岸に開くものが多く、山脈も東西に走っている関係で、大西洋岸と地中海岸との南北交通が困難であり、もし、ポルトガルが国境を画さなかったならば、スペイン自体の地理的環境は変り、経済・文化の流動性を増したに違いなかったであろう。よくいわれることであるが、スペインとポルトガルとの国境は自然的条件によらず設定され、民族史から定められたとはいえ、常にスペインからの圧力を受けるゆえをなすものであった。

ポルトガルは、四つの異なった性質の丘陵地帯から成りたっている。ドーロ河以北はスペインのメセタ台地の延長にあり、カンタブリア山脈が深く入りこんでいる最もきびしい自然環境にあり、ドーロ河とタホ河の間は小山脈がいくつか連っている丘陵地帯、タホ河とサードウ河の間はスベ

Atlantic Economies, 1973. p. 15. スペインについての実態把握には近藤仁之「近世前期のスペイン人口に関する序考」に詳述されている。

発展拠点としてのイベリア経済の特質

インのエレラモレナ山地が傾斜している波状丘陵地帯で、最南部はアルガルブア丘陵地帯をなす。しかし、イベリア半島全般の地理的環境の際に述べたように、スペインの中央部がおおっているような山岳台地とは異なり、大西洋岸にむかって広い丘陵の傾斜と平野からなる点と、南北の気候の差が大きいとはいえ、全般に典型的な海洋性気候をもち、欧州の中では最もめぐまれたものである点は、やはりポルトガルを理解する上で必要なことであろう。もっとも、産業の上ではスペインとは対照的にかなり単調で、農・漁業が中心であった。そしてむしろ、その経済的基礎はリスボンにみるような貿易にあったといつてよい。その方向は勿論、対スペインと地中海貿易及び大西洋貿易であったが、ポルトガルの自主的貿易路線は大西洋貿易にあり、なかでもスペインとの政治的關係より早くから、イギリス・フランスとの貿易依存度は高かった。これについては後に詳述するであろう。

ポルトガルの民族史は、イベリア半島のそれと同じではあるが、二つの点でスペインとの相違をみる。一つは回教徒から「本土の回復」を計った運動が北西部よりの南下という形でなされたこと、二つにこれと関連するがローマ風の社会的關係が温存され、回教徒の影響がスペインほど強くなかったことである。ポルトガル王がカスティア王から独立し、ブルゴーニュ朝を開いたのは1143年であり、その後、回教徒から南部奪還を計ってきた過程で、北部にはフランドル移民が盛んに誘致されている。これはローマ風の強い北部の文化的特色をつくったゆえんをなしたが、その農業形態は自由農民制で、回教徒の支配の強かった南部の巨大な封建貴族領制とは異ならしめることにもなり、ポルトガルの二重構造を招来することになったとみられている。第13世紀後半、早くもイスラム君主的中央集権下に統一され、カスティア王国との封建的關係が打切られ、イギリスとの貿易関係を深めていった。そして、ポルトガルはリスボン、オポルトの海関税収入に大きく依存するようになると共に、農業が軽視されたという。しかし、ここでポルトガルの1世紀にわたって展開されたアフリカ西海岸の探索と喜望峯迂回航路の発見についての背景として、またその過程にみられる行動様式、ひいてはラテン・アメリカでの植民地形成の特色をもたらしたものとして、こうした環境からの關係条件を改めて見直しておく必要があるように思う。

第一に、貿易路線の自主的擴張がアフリカ西海岸に志向されたのは、単純に言えば灰色の大西洋に面し、東にスペインの山岳とその政治的圧力を受けてきたという地理的・政治的環境にもとづくものでもないかも知れない。欧州貿易にしる地中海貿易にしる、スペインとは異なった不利な条件にあるポルトガルにとって、最も可能性のある擴張は大西洋を西に探索するか、アフリカ大陸に沿ってゆくかいずれしかなかったことは当然であろう。前者がアソレス諸島であり、またマディラ島の発見であった。後者がカナリア諸島を経てボジャドル岬を廻るアフリカ西海岸への探索となる。

第二は、このように探索の背景には、さきに述べたようなポルトガルの産業構造、即ち南北の二

重構造の対立を含みつつ農業＝輸出といった姿と、当時の欧州における所得水準の上昇、これにもとづく砂糖・葡萄酒の需要の増大、マーケットの拡大とがあったということである。歴史的には、しばしばポルトガルの地理的発見が東印度貿易航路にあるとされるが、これに直ちに眼をむけてしまうことは決して妥当ではない。喜望峰発見まで約1世紀を費しており、実際、ポルトガルがおこなったことは海外諸島の地理的発見、そしてここへの移民—栽培—輸出というプロセスをたどり、アフリカ西海岸の探索へのステップとなっていたからにはほかならない。むしろ、このことが歴史的に改めて注目すべき事柄というべきなのである。事実、1415年のセウタ占領を除いて、1418年のポルト・サン島の発見は植民に適しているという報告をともなっていたし、その後ここからマデイラ島に移住をみて、その大半が農業用に開かれ、砂糖さびや葡萄が盛んに栽培されている。しかもこれは砂糖や葡萄酒の輸出として作られたものであった。また1431年の発見によるアソレス諸島もこれと同様に移民による耕作がなされていることもそうであって、いわばポルトガルの第15世紀前半の初期発見は、いずれも発見—移民—栽培—輸出といったパターンに特徴づけられ、そこにポルトガルにとっての地理的発見の経済的意義があったといわなければならない。⁽¹⁴⁾これはスペインのそれとの根本的相違であったし、後にブラジルにおけるポルトガルの植民の産業を決定する重要な背景にもなったものである。⁽¹⁵⁾しかも、多くの人々が見逃している点は、ポルトガルのこうした第15世紀前半の地理的発見の同国にとっての経済的意義が、実は1434年以後のアフリカ西海岸に対する探索の費用の出所であったということである。すなわち、この有名な探索に要した費用は、マデイラ島の輸出貿易が生ずる収入のうち、王室が受取る五分の一税よりまかなわれたものであった。それ故に、ポルトガルのアフリカ西海岸探索は、これ以前における諸島の発見と植民と経済的に結びついているものとして理解されねばならないであろう。

もっとも、このマデイラ島からカナリア諸島を経てボジャドール岬を廻り、ブランコ岬に達する探索から、ポルトガルの地理的探索の目的なりそのパターンは大きく変化しつつあった。すなわち、そこでの具体的な経済的果実は、奴隷貿易や回教徒の隊商との接触による東方物資との交換である。前者にしても、しばしば奴隷捕獲の史実が強調されるけれども、その多くは回教徒との奴隷貿易であった。そして当初はこのアフリカ奴隷がポルトガル南部の農業にむけられたことは確かであるが、⁽¹⁶⁾更にすでに発見した諸島の輸出プランテーションの労働力にも受け入れられたことは重要な点である。

注(14) 「マデイラ島のそれは欧州砂糖市場を席卷し、1580年以降、約1世紀にわたって砂糖世紀を享受し、第17世紀前半の砂糖船団は100隻とされ、東印度香料貿易に敗退する本国の存亡を左右するほどの国家的意義を担った。」(「近藤仁之西領西印度諸島における砂糖革命の経済的意義」社会経済史学1965・30号)

(15) C.フルタード「ブラジル経済の形成と発展」水野一訳、前稿でも記したように、その砂糖栽培は欧州市場を中心にラテン・アメリカ・カリブ海諸島の経済発展史に欠くべからざるものである。殊にブラジルについては重要であり、本稿では、これにいかに関動的な連関をもつに至るのかが、換言すれば内的必然性をもってひかれる発展パイプにどのような形で点火されるかを採ろうとするものである。

(16) エリック・ウィリアムズ「資本主義と奴隷制」中山毅訳。

発展拠点としてのイベリア経済の特質

そこで、これを前述のような諸島の地理的発見の経済的意義と結びつけられるならば、それは発見—移民—栽培—輸出—アフリカ西海岸探索—奴隷輸入—栽培—輸出という一つの動的プロセスを形づくることになる。と同時に、奴隷労働による砂糖栽培は、後におけるブラジルやカリブ海の産業、生産様式の原型をなすものとして注目されなければなるまい。しかし、アフリカ西海岸の探索は、その費用が王室の五分の一税に依存していただけに、いわばポルトガル及びその属領の新諸島における農業生産力と輸出利益に根本的には制約されていたことは事実である。以上のように、探索が奴隷貿易という果実を生み、輸出生産の基礎にすえられたとはいえ、それだけでは探索の経済的な拡大再生産は、当時の状況では必ずしも不十分であったことは当然と言えよう。これに対して、回教徒とのアフリカにおける貿易は、東邦物資の欧州へのこれまでの流入ルートから、はるかにはずれていたポルトガルにとって、新しいルートを切り開くものであったし、直接この貿易の利益を取得する機会を持つものであったという意味で、これは探索のみ力を一層増すものであり、またその結果としての貿易の利益が、探索による貿易への機会に対する投資の源泉となるという新しい動的なプロセスを生んでいったと解される。ここに最も歴史的な喜望峰迂回の航路発見が実現し、ポルトガルは、それまでとは異なる経済発展の姿をもつに至るのであった。これこそ前節まで述べてきたスペインとの新大陸発見前のポルトガルの特徴があると言えるのではあるまいか。

(商学部教授)